

---

# 新聞にスキャンダルを

頬白丼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新聞にスキヤンダルを

### 【NZコード】

N7792A

### 【作者名】

頬白丼

### 【あらすじ】

高校生、桜井龍人は新聞部部長である。彼の所属する七星高校は、生徒中心の校風である。新聞部は、何者の圧力にも屈せず、原稿を書くのだ！

## (前書き)

この物語はフィクションであり、人物、学校、漫才コンビ名等はすべて架空の物です。

「桜井……頼む、俺を……新聞部員にしてくれ！」

新聞部部室のドアをノック一つせずに開けた少年は、そう言った。部室内にいた少年、桜井龍人は、突然の入部希望者に物怖じせず、メガネ越しに少年を見る。

「なんだ突然。しかもその父と母と妹をハサミジャガーに殺されたかのような発言は」

「リューート、古い」

もう一人の新聞部員の少女、春日ツクシ（かすが つくし）が、すかさずツッコミを入れた。

「おばあちゃんが言ってた……『人は前を見るもの……だが、後ろを知ってるからこそ前だけを見れる』と」

龍人が人差し指を天に向けて言うのを、ツクシはなおざりな相槌で返す。

「はいはい、新しい新しい」

この二人のやりとりに割つて入れないのか、少年は勢い良く入室しても、それまで、という状況になつている。

「まあ、冗談はともかく。ノックもしないで入ってきて、人のことを呼び捨てにするなんて不躾じやないか？ こつちは生徒会役員選挙の公示内容と、PR文その他諸々で、クロック・アップするくらい忙しいんだ。せめて名乗つたり挨拶したり、それくらいしないとまったく相手にされないと、諸星くん」

龍人に“諸星”と呼ばれた少年は、名乗つてもいなのに、クラスだつて違うのに、名前を呼ばれたことに驚きを隠せない様子だ。

「なぜ俺の名を？」

「ツクシ、お笑い同好会の名簿……」

「出してるよー」

龍人が言い終える前に、ツクシはパソコンのディスプレイに、目

当ての名簿の田辺のページを出していた。龍人はその名簿を読み上げる。

「一年五組出席番号一十一番、諸星孝介お笑い同好会所属。『うすぼけもりこし』のシシコ///担当……のワリにて、シシコ///モロアクションもイマイチだね、諸星くん」

「な……なんでそんな名簿が……」

「ああ、『うすぼけもりこし』つて『諸星孝介』のアナグラムなんか。相方の西原くんはまったくコンビ名に関与していないね。んで、名簿だつたね。それは新聞部の情報収集能力をナメないで欲しい。その上、対面式でキミたちがやつたネタがつまらなくてね。それで顔を覚えてた。先生のモノマネなんて、新入生に解るわけないことくらい、気づくだろ。さらに『こういつ先生がいるんですよ』なんて説明し始めたからな」

孝介は龍人に捲くし立てられ、一つ一つの言葉を咀嚼してから、一言。

「そ、う。面白いネタを作るには、俺、いろんなこと知らないんだよ。だから、俺にいろいろ教えてくれ！」

「知りたいことは自分で調べる。インターネットなら簡単だ」

「その『知りたいこと』が解らないんだ。でも、新聞部にいれば、何を調べるか、桜井……くんが指示してくれる。何でもやるから、新聞部に入れてくれ！」

ついには土下座をする孝介。

「リュー、ト、やる気はあるみたいだけど？」

「そのやる気は……」

龍人は口に出しかけた言葉を飲み込み、少し考える素振りを見せ

る。

「『そのやる気は』なに？」

ツクシが訊く。急に黙り込んだ龍人が、何を考えているか解らないのだろう。

「いや、何でもない。とりあえず、俺は手伝って貰おうかと思つて

る。ツクシは？

「異論はないよ」

「というわけだ、諸星くん。今は生徒会役員選挙特集のため手が放せない。入部手続きは選挙後になるが、それでもいいなら、放課後はここに来てくれても構わない」

「それでいいよ」

「そうか。よろしく、諸星くん」

こうして、新聞部員見習い、諸星孝介が誕生した。

「あの……俺は何をすれば……？」

孝介が見習いになつた翌日も、龍人とツクシはパソコンに向かつて作業をしている。傍目には、何かが取り憑いているように見えるかもしれない。

「表にアンケート回収ボックスがあるから、中身を持つてきてくれ。ロツクはファイズで解ける」

「ファイズ？」

意味が解らず、孝介は聞き返す。

「『555』だ。揃えたあと、『スタンディング・バイ』と言いつのを忘れるなよ」

「わ……解った」

孝介が部室から出ると、ほどなく“スタンディング・バイ”とうセリフが聞こえた。

「取ってきたぞ」

孝介は数枚の原稿用紙と、アンケートを持ってきた。

「ありがとう。とりあえず用事があるのは原稿用紙だけだ」

そう言つて、原稿用紙の方だけを受け取る龍人。“アンケートを読んでおぐのもいいぞ”と言つて、アンケートをそのまま孝介に預ける。

「原稿用紙には何が書いてあるんだ？」

「今回の選挙の候補者のPR文……つて、『の』が連続したな。ちょうど、会長に立候補した一人の物だな」

「へえ、会長って誰が立候補したの？」

「知らないのか？お笑い同好会の横山くんも出るのに？」

生徒会長候補、横山洋介はお笑い同好会である。

「え！ヨースケのヤツ、マジで立候補したんだ……」

「今回は横山くんと井上くんの二人で決戦投票だよ」ツクシが補足をする。

「ツクシ、どうやりたい？」

龍人はツクシに一本のPR原稿を見せる。

「井上くんの方が、ちゃんとした日本語だからやりやすそう」

「だからやりにくい方、横山くんの原稿か

「違うっ！」

言いつまでもなく、横山のPR文は、龍人の担当となつた。

翌日、孝介はお笑い同好会の方に出席したため、新聞部は一人である。

「ツクシの分はそれでラストか？」

「うん。後三十分くらい」

「そうか。なんとかスケジュール通りになつたな」

「ホント。でも、来週は選挙結果と総括、新生徒会役員のインタビ

ュウ……」

「その翌週はヒマになるけどな」

「早く来ないかな、再来週」

「来週も忙しいからヒマになるんだ」

「だから来週もがんばろ！」

と、非常にポジティブな結論が出たといひで、部室のドアが開い

た。ノックのない来訪者といえば……。

「諸星くん。ノックくらいしたらどうだとい回田を言えれば二回田はノックしてくれるかな？」

今日はお笑い同好会に出席しているはずの孝介が、血相を変えて入ってきた。

「そんなことより！ とんでもないモノ見ちまつた！」

「とんでもないモノ？」

ツクシが聞き返す。

「新聞部員としては見逃せない発言だな」

「だろ？」

「そうやってひっぱるのは見逃せない。とんでもないモノがとんでもないほど、新聞は先に何が起きたかを述べる。エンタテインメントなら合格かもしれないが、新聞部員としては不合格だ」

「そこかよ！」

「……ツクシ『ミなら合格かもしれないが……』

「諸星くん、早く言った方が良いよ……」

龍人が機嫌を損ねかけたのを察し、ツクシが割って入る。

「あ……ああ。屋上で、井上がタバコ吸つてた」

「井上？ この学校に何人『井上』が居ると思う？」

正解は教師一人、生徒八人、事務員一人だつたりする。

「数は知らねえけど……ほら、会長に立候補した井上勇武いのうくわいさむだよ

「……スキヤンダルか。証拠は？」

「写メ撮つてきた。コレだ」

龍人とツクシが孝介の携帯電話をのぞき込むと、井上がタバコをくわえている写真が表示されていた。場所は校舎の屋上。校舎から屋上に出る扉の窓から撮つたのだろう。井上まで距離はあるが、顔もタバコも、確認できる。

「……諸星くん……ひっぱつてこれだけ？」

「悪かったな。でも、スクープの瞬間だぜ？」

「ああ、スクープだ。ツクシ、号外の準備だ。見出しへ『生徒会長

## 候補の喫煙の瞬間『でいくぞ』

「ん？　あ、りょーかいですっ！」

「諸星くん、お疲れ。その画像をくれ。そして、後は俺たちに任せろ。お笑い同好会抜け出してきたんだろ？　戻った方がいいな。井上くんに気づかれてた場合、新聞部にいるのがバレるとマズい」

「解った。頼む。俺は、お笑いの方に戻ってる」

孝介は、部室を後にした。

「リユートの予想どおり、だね」

「『何かやるかも』としか言つてないから、予想とは言えないよ……さて、ど。ツクシ、この写真どう思う？」

「合成じゃない？　もちろん詳しく調べてみるけど」

そう言つて、ツクシはフォトレタッチソフトを立ち上げ、写真データを開いた。

「こんなことやつてる場合じゃないんだが……頼む」

「いえいえ。今日は簡単に帰れないって思つてたし」

「すまんな」

「つづん。いま何を奢つて貰お……」

「三百円以内でよろしく」

「…………わかったわよ…………確かにコレ、三百円の仕事だね…………タバコのトコをアップにしてみたけど、タバコをくわえてるんじゃないなくて、刺さつてる…………画素の粗さも顔とタバコで全然違うし、タバコの縁が周りとなじんでないよ…………シロートすぎ」

パソコンで、誰でも簡単に合成画像を作れるようになつたが、結局は使用者の技量で出来栄えが決まってくる。プロが作った物はそれこそ本物でも通用するが、残念ながら出来が悪いものは一瞬で見極められてしまう。今回の写真は、後者だ。

「…………むしろコレを証拠に使おうとする精神がスゴいな」

「……多分、出来ないなりに頑張つたんでしょう……」

「じゃあ、行こうか……」

「……そだね」

龍人とツクシは、部室を後にした。

孝介は新聞部の部室から出て、まっすぐお笑い同好会の活動場所である空き教室へ向かった。引き戸の窓には、内側からグラビアアイドルのポスターが貼つてあるので、中の様子は見えない。教室に入るなり、会長候補である横山が、声をかけてきた。周囲には、相方の西原や、その他三人の同好会員がいる。

「お、コースケ。どーだつた?」

「ああ、あいつら頭いいふりしてバカだぜ。カンタンに信じて、号外作ってる。あの勢いなら明日配られるんじゃね?」

「ハハッ! マジバカだ! 気の毒だぜえ……俺らのために一生懸命働いてくれて」

「いいんだよ、あの二人、新聞バカだから」

お笑い同好会の面々が好き勝手に話している……その時。

「おばあちゃんが言つてた……『全てを終えたその瞬間が最大の隙だ』と」

引き戸が開く。そこにいたのは桜井龍人と春日ツクシ。

「…………リュート…………それ好きだね…………」

「ああ、この前やつたとき、なかなか心地良くてね」

「あ、リュート、ノックしてない」

「ノックしないヤツにするノックはないよ」

「カッコいいようで、そうでもないね……」

「最初から疑つてたんですよ」

龍人の発言に孝介は驚きを隠せない。何かドジをしたか、何がいけなかつたのか、自分の行動を一つ一つ思い出しているように見える。

「まず、だ。『もつと面白いネタを作りたい』という理由は、確かにいつももらしい。だが、お笑いに対し、漫才に対しで真摯なワリには、行動が伴つてない」

「行動なら新聞部に入つただろ?」

「ああ。確かにそうだ。『社会的なことを知りたいから新聞部に入った』非常に能動的だし、行動が伴つてゐるよつに見える。が、『何を調べればいいかは解らないから、指示を求める』というのが、何よりも受動的に思えてね。それに、そこまでお笑いに対して情熱があれば、新入生に対して『先生のモノマネ』なんてネタはやらない。となると、別の理由として、お笑い同好会から候補者が出ることから、『新聞に、横山くんに有利に働くことを書こうとしてるんじゃないか』と思い、監視の意味で部員見習いになつてもらつた」

「桜井……お前初対面のヤツをそんな目で見てるのかよ?」

孝介が声を荒げる。無理もない。

「そんなことないよ。リューートは疑わしい理由が無かつたら、疑つたりしないよ」

「諸星くんの入部理由に、さつき言つた不審な点を見つけたからね」「でもあの『写メは? 僕が疑わしいからつて、[写メまでニセモノとは限らないだろ?」

「フォトレタッチソフトでカントンに合成できる。合成だという証拠をお見せしよう……ということは、シクシ、よろしく」

「りょーかいですっ! ロレにちゅーもーくつ!」

ツクシはノートパソコンを開いて、画面をお笑い同好会の面々に見せる。

「左が諸星くんに貰つたもので、右が口の部分をアップにしたもの。タバコはどうなつてますか？」

孝介をはじめ、お笑い同好会の面々は無言だ。

「答えられないなら、俺の意見を言わせてもらおう。俺は、タバコが口に刺さつてるように見えるが、どうだろ？」

龍人の問い掛けにも、無言。

「他にも、タバコと周りの境界が不自然だつたり、ズームしたときの画素の粗さが違つたり……」

「それ、私の受け売りじやん」

「というわけで、合成写真です」

それでも、孝介をはじめ、お笑い同好会の面々は無言。むしろ、氣味が悪い。

「質問は……ないか。この写真については、当然掲載しない。だが、今回の件に関しては、別に記事にするつもりはないから、安心して健全な選挙活動を行つて……」

龍人は、最後まで語ることができなかつた。

一瞬。

孝介が飛びかかり、龍人の頬に右フックを見舞つたのだ。

「リュート！」

たまらず倒れこんだ龍人に、ツクシが叫ぶ。

「ウゼエよお前え！ グダグダ細けえこと言いやがつて」

「ああ、ツクシ。大丈夫だこの程度。マサキのパンチの方が激しいよ……で、諸星くん。いや、お笑い同好会の皆さん。対立候補のスキンギンダルをでつちあげて、俺を殴つてまで、横山くんを会長にして何がしたい？」

龍人の問いに、孝介が答える。

「ヨースケが会長になりや、お笑いに部費とか回つてくるだろ？」

そんなことも解んねえのか？ 新聞部さんよお

「……部費は何に使う気だ？」

「合コンに決まつてんだろ？」

「……部費は、領収書を貰つて、顧問の教師に提出。承認を得ないと貰えないシステムだぞ。それに、部員数に応じて学校から支給される額が決まつてゐる上に、『部』と、『同好会』『研究会』では大きな開きがある。六人のお笑い同好会には……誰が会長でも、せいぜい三万円がいいところだ」

「…………じゃ……じゃあ、新聞部は何なんだよ？ パソコン一台にテレビにDVD……ソファにテーブルだって高いだろ？ 他にだつて、何に使うか解らん物だらけじゃないか」

孝介の疑問ももつとも。所属二名で、“新聞部”とは名乗つても、正式には“同好会”扱いなので、学校から支給される部費は雀の涙程度。だが、総額にすると軽自動車が買えるほどの設備が整つているのも事実だ。

「ああ、部室にあるものは、九割くらい俺の私物だ」

考えてみれば簡単な答え。部費で買った備品でないなら、私物。

「な……なんだって？ 金は……」

「ま、ちゃんと合法的に得た金を使つてるからね」

龍人は、株取引で儲けた、ということを、意図的に伏せた。言つてしまふと、知識もなく取引をしてしまいそうな連中がいるからだ。合コン程度の出費なら、バイトで簡単に稼げるだろ。下手なことするより、確実だ

言い終わるとツクシが寄つてきて、ハンカチで龍人の口を拭う。気づかなかつたが、血が出ているようだ。

「大丈夫？」

「大丈夫だ。歯は折れてない。少し口の中を切つたみたいだな」

「充分痛いと思うけど……」

「氣にするな。さ、部室に戻ろ。今日中に印刷しないと、間に合わないからな」

龍人が教室から出ようと歩き始めたとき、孝介が話しかけてきた。

「まさか、この事を記事にするんじゃ……」

龍人は立ち止まり、振り返る。

「まさか、一方的に利用しようとした挙げ句、それがバレて暴力を振るつたことを隠して欲しいなんて、虫の良すぎるこことを言つてゐるのか？」

「う……」

図星なので、そこで終わる孝介。

「明日の朝のホームルームまでには、新聞を配布物ボックスに入れてくれる優しいやならないのに、こんな事で時間を食つた」

突然、別の事を話し始めた龍人に、お笑い同好会の面々が注目する。

「明日の朝、刷り上がった新聞を、職員室の配布物ボックスに入れてくれる優しい人が六人くらいいてほしい……独り言だ、気にするな」

龍人はそう言つて、教室を後にした。ツクシは小走りでそれに付いていった。

「リュート……ホントに大丈夫？」

ツクシが心配そうな面もちで訊いてくる。

「…………そろそろ見えないかな？」

龍人は辺りを見回し、お笑い同好会の連中が視界にいないことを確認する。

「よし、いない。実は結構痛い。『新聞配達』で済ますには、割に合わないぞ」

「…………はあ…………やせガマンしてたのね…………」

ツクシの口から、ため息と一緒に言葉が出た。

「クソ！ 明日こき使つてやる！」

「…………陰湿だね…………」

部室に帰り、原稿を書き上げた一人は、プリンタをセットして下校した。

「部室を出たところで、ツクシが何かに気付いた。」

「リュート、アンケートボックスのナンバー変えなきや！」

そう、アンケートボックスの暗証番号は、もはや部外者、いや、最初から部外者の孝介も知っている。変更しなければ、自由に開けられてしまう。

「諸星くんが開けるとは考えにくいけど、新聞部の信頼性に関わってくるな。変えるか？」

龍人はアンケートボックスを少し操作して、新しい番号をセットした。

「カイザにしたの？」

「いや、それは安直すぎる。『青空が好きな人の技の数』引く『青

空を飛ぶ人の技の数』だ」

「え、飛ぶ人の方は解らない……」

「調べておくようだ」

「はーいっ！」

そう言って挙げた手に、何か紙が握られている。

「ツクシ、それ何だ？」

「これ？ 下校途中にあるスワイーツのリスト」

「……あ、そう」

「ここチヨコパフュがいーー！」

「それは三百五十円だぞ」

「ううん。バナナが入ってるから。バナナはおやつに入らないから、バナナ分マイナスで三百円ー！」

「なんだその理屈……」

「いいでしょ？ 私、もう口の中がチヨコパフュモードだよ。チヨコソースがいっぱいかったアイスにコーンフレーク……もう考えただけで味が口に広がる」

「……味が口に広がってるなら、それだけでいいだろ」

「ダメ！ ちゃんと食べないと……つてリュート、ちょっと待って

！」

途中で歩き始めた龍人を、ツクシは小走りで追いかけた。

(後書き)

お読みいただきありがとうございます。

作者の頬白井です。

冗談がめちゃくちゃ多いです。決めゼリフにしちゃってます。  
今回だけなので、気にしないでください。

とりあえず、作者の好きな番組が判つたとこついとど……。  
で、いつも通り。

ご意見、ご感想等いただけますと、マジで励みになります。  
良かった点悪かった点は、なかなか自分では気付かないものです。  
よろしくお願いいいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7792a/>

---

新聞にスキャンダルを

2010年10月8日15時36分発行